

お
は
な
し

羽根さんと

凧さんのお話

大熊米子

お正月のあるお天気のよい日の事でした。いつもは、お洋服ばかりの、ふみ子ちゃんも、まさ子ちゃんも、かづ子ちゃんも、今日は長いたんのおべべを着たり、おりポンをつけたり、可愛い日本人形の様です。三人は、おひるから、ずつと羽根をついて居ました。二人づつおむかいあい、

ひとりきな

ふたりきな

みてきな

よつてきな

とうたいながら追羽根をつくのです。めつたに着ないおべべの、長いもお邪魔になつたり、羽子板が重すぎたりして、大低四つぐらいつくと、どちらかゝ駄目になりました。駄目になつた方が、待つて居た方とおかわりして、

ひとりきな

ふたりきな

みてきな

よつてきな

いーつきても

むーづかしい

なーんの

やくし

ここのまじや

とーよ

十までつづくと三人とも大喜びをします。でもなか／＼十まではつゞきませんでした。

何度も何度もくりかえして居るうちに、まさ子ちゃんのついたお羽根が、どうしたのか高くポーンと、とんで、お屋根のどいの中にポイと入つてしまいました。

「あら、どうしましょう」

「困つたわね」

三人で手に手に羽子板を出来るだけのばして、ピョン／＼とんでみましたが、到底といまでは届きません。

「しかたがないから、後でお母ちやまにお願ひしてとつて頂きましよう。それまで私のもつて居る新しいおはねでつきましよう」

まさ子ちやんが、又一つ新しいお羽根をおたもとから出しました。三人とも、といの中にとんで入つたお羽根が可愛そつうで氣になりましたけれど、きれいなお羽根で、ひとりのきな

ふたりきな

とつき初めると、間もなく、先刻の可愛想なお羽根の事は忘れてしまいました。

そのうちに、少し重くなつて、眞赤なお太陽様が、ゆらくとゆれながら、まさ子ちやんのお家の屋根の陰に、さようなら／＼とお入りになるところでした。

「あら、もうお夕方よ」

「またあしたね」

「じやあ さようなら」

三人は、明日のお約束をして歸つてゆきました。

「あ、待つてください、まさ子さん…… ふみ子さん、和子さん、私を連れて行つて下さい」

羽根さんは、出来るだけの大聲で呼んだのですが、すつかりといの中のお羽根さんの事を忘れた三人には、少しも聞えなかつたのです。可哀そうに……とう／＼といの中のお羽根はおいできぼりになりました。

其晩の事です。もうすつかり眞暗になつてしまいました。

可哀想なあのお羽根は、といの中で、寒いのと淋しいのとで泣いて居ました。シツクンシツクンと泣いて居たら、どこからか、

「羽根さん／＼、ねえ、どうしたの？どうして泣いてるの？」とやさしく聲をかけた人があります。羽根さんは泣きながらそつと見まわしてみました。でも眞暗ですから何も見えません。だから又、シツクン／＼と泣いて居ました。

「ねえ、泣くのはおやめよ」今度は、先刻よりも少し大きな聲が、確に聞えました。

「だーれ？ 私に何か仰言つたのは？」

羽根さんは、少し元氣を出して、暗やみの中に聞いてみました。

「僕よ、僕はねえ、風の奴さんだよ。晝間一郎ちやんが上げて居た時松の木にひつ掛つてね、一生懸命とつて下さろうとしたんだけど駄目だつたの、そしたら一郎ちやんが『お父様およびして来よう』つてお家の中にとび込んでいらしたんだけど丁度お父様のところにお客様がいらつしやつたんで、それきり一郎ちやん忘れておしまいになつたの」

「まあ、それでも風さん泣かないの？」

羽根さんはびつくりして聞きました。風さんは笑つて、

「うん、僕泣きませんよ、強いんですもの」

「こわくはないの？」

「怖くなんかないよ、ほら、上を見てごらん……ね？ あんなにお星様が見て居て下さるでしよう？」

「だつて、私は怖くて、淋しくて、寒くて……ゆうべはね、まさ子ちゃんのお枕許で、羽子板さんに抱っこされてねんねしたんです。……それなのに今日は、こんなつめたい所で……ねられないわ、シツクン〜」羽根さんは又泣き出してしまいました。

「ねえ、もう僕が居るから泣くのはおよしよ、ね」
「だつて……シツクン、だつて……シツクン……」

羽根さんは暫く悲しそうに泣いて居ましたが、
「風さん、それじゃあもう泣くのはやめますから、私をおんぶしてとんで頂戴ね、お願いよ」でも風さんは云いました。

「うん、僕もさつきから、それが出来たらい〜と思つて居るけれど、僕のあんよにはグル〜糸が巻きついて、それが又松の枝にグル〜巻きついて居るから、どうにもならないんだよ、困つたなア〜」
シツクン〜、又羽根さんが泣き初めました。

「あつ 羽根さん、大丈夫〜、明日の朝迄お待ちなさい、ね、朝早く雀さんが来るから、そうしたら僕が頼んで上げるよ、ね、『羽根さんをくわえてチャンと下へ落して上げてよ』つてね、それでい〜でしよう？ だからもう今日はおやすみ僕も明日の朝一朗ちやんが又みつけて下さるのを楽しみにして寝るよ」……

それでも暫くの間は、シツクン〜と泣いて居た聲も、やがて聞えなくなりました。風さんも、もうだまつて居ます。きつとねてしまつたんでしようね。お家の中も、もう何の音

も聞えません。何も彼もねんねしてしまつたのでしよう。

先刻から、だまつて、じつと風さんと羽根さんのお話を聞いていらしたお星様は、すつかり比の二人が可哀想におなりになりました。夜の間に二人をお庭におろしておいてやつたら……どんなに羽根さんも風さんも喜ぶだろう……それに子供達も明日の朝どんなに嬉しい聲を出すだろう、とお星様はお考えになりました。……でもどうやつておろしましょう……暫く考えていらしたお星様はやがて嬉しそうな顔をなさて、風さんをお呼びになりました。

「ねえ、風さん、あそこに可哀想な風と羽根が居るんですよ二人ともお嬢ちゃんや坊ちゃんに忘れられてしまつたんですもう夜もおそいし、お氣毒ですけれど、あの二人をお庭におろしてやつて下さいな」
すると風さんは、

「はい〜お星様お易い御用です。一吹きさつとやりましよう」風さんは早速ビューツと吹きはじめました。寒い〜冬の風です。お星様も思はず寒そうにチラ〜とまばたきをなさいました。其の時、小さな羽根さんのおからだは、ふわ〜と持ち上げられてひら〜と〜とお庭にとんでおりました羽根さんは、寒いお風にお目々をさましたトタンで、あつと云う間の事でした。羽根さんは、自分がどこに居るかやつと判ると、餘り思いがけなかつたので、うれしくて〜大きな聲を上げました。

「風さん、風さん、私おりられたのよ、風さんがおろして下

さつたの」

羽根さんの可愛いお聲がちぎれちぎれに聞えてくるので、
凧さんはお返事をしようと思つても、それどころではありま
せん。糸でしつかり松の木に巻きついている凧さんは、ビュ
ーッとお風が吹く度に、パーッと飛上りかけるのですけれど
糸に引張られて、やつぱりとべません、ベサリと又落ちま
す。何度も何度も、それをくり返しましたが、其の中にブツ
ンと糸が切れました。糸の切れた凧の奴さんは、サーッとお
風にのつて舞い上つてから、ひら／＼と羽根さんのすぐ
傍におりて來ました。

「凧さんッ」

「あゝ羽根さんもそこ？ よかつたねエ、凧さんにお禮を去
おう」

二人はお聲を揃えて、

「凧さん／＼有難う、本當にどうも有難うございました」
と云いました。凧さんは、もう遠くの方を吹き抜けて行き
ながら、

「どういたしましたして、お星様が私にお頼みになつたんですよ
じやア おやすみ」

二人は今度は、高い／＼お空で、ニコ／＼して見ていらつ
しやるお星様を見上げながら、

「お星様ア、本當に／＼どうも有難うございましたア」と云
いました。お星様は、

「あゝよかつたね／＼又明日もよいお天気だから、皆で仲好

くお遊びなさいね、じやア静におやすみ」

と仰言いました。二人は今度こそ、本當に安心して眠りま
した。明日の朝、まさ子ちゃんや一郎ちゃんが見つけたら、
どんなに大喜びをするでしょう。

(四七頁より)

に對して次のような通達があつた。

このことについて、本日、天野文部大臣から次のような談
話がありましたので、「文化の日」その他國民の祝日にあつ
つては、談話の趣旨をお含みの上、行事を行われるよう参考
のため、お知らせいたします。

貴機關に於いては、それぞれの學校……に對しこの趣旨を
周知徹底されるよう願ひします。(以下略)

談話——「文化の日」その他國民の祝日は、よりよき社
會、より豊かな生活を築きあげるために、國民こそつて祝
感謝し、又は記念する日として、われわれ國民がみずから定
めた日であります。したがつて各學校においては、學生生徒
兒童に對しこれらの祝日の意義を徹底させ、進んで國家及び
社會の形成者としての自覺を深くさせることはきわめて必要
なことと思われます。このために各學校では、訓話、講演會
學藝會、展覽會、運動會等それぞれ特色ある様々な行事を催
されることと思ひますが、その際、國旗を掲揚し、國歌を
齊唱することもまた望ましいことと考へます。又各官廳、
各家庭においてもぜひともこれらの祝日には國旗を掲揚し、
祝意をしめされるようおすすすめします。